

唐長安大明宮発掘の成果と課題

—考古学の新成果と興安門遺跡の発掘と研究—

何 歳 利
(馬彪 訳)

唐都長安城の宮殿で、最も大きいのは「西内」という太極宮、「南内」の興慶宮及び「東内」の大明宮であり、当時それらを「三大内」と呼んだ。大明宮は「三大内」のなかで、最も規模が大きい、壮麗な宮城であり、唐長安城城外、東北部の龍首原（今西安市北郊の含元殿村、坑底寨村一帯）、すなわち当時長安城（外郭城）北部における禁苑のなか（図1）に位置する。面積は3.2 km²、明清時代北京紫禁城の約5倍となる。

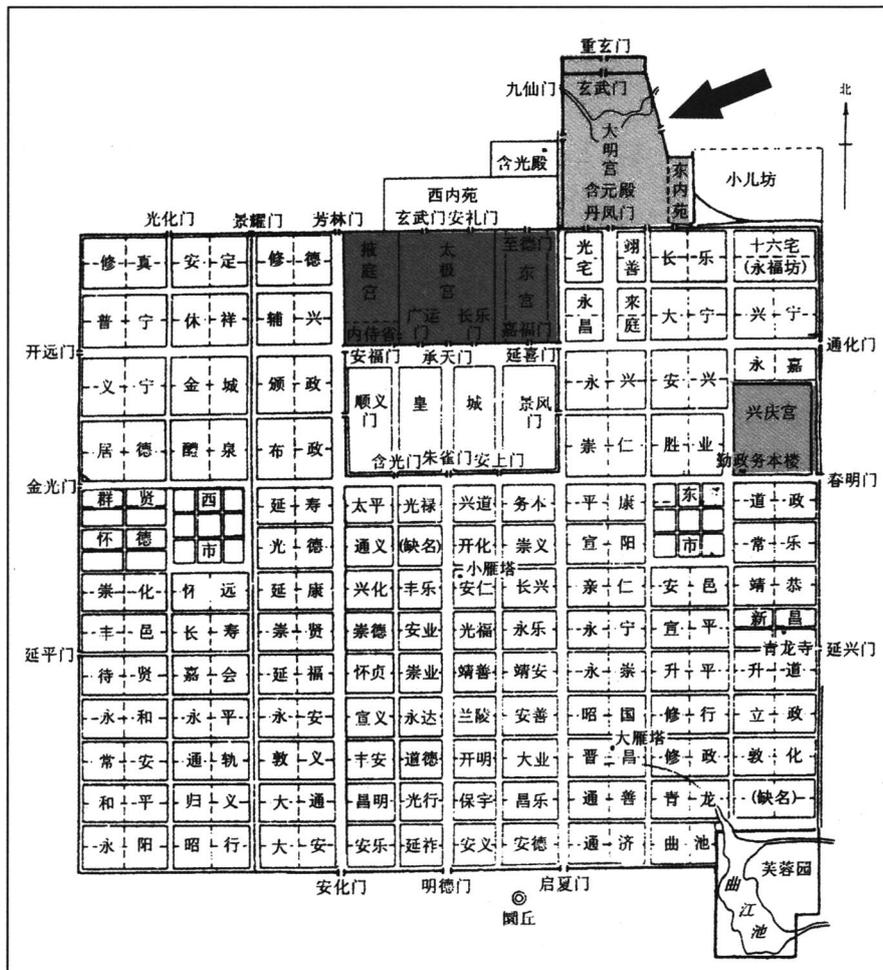


図1 唐長安城遺址復元平面図

一、大明宮遺跡の概述

大明宮は唐長安城の東北、禁苑の東南部に位置し、唐太宗の貞觀八年（634年）に造り、始めは永安宮と名づけたが、翌年（635年）大明宮という名に変更した。工事は唐高祖の死のため中止したが、高宗の龍朔二年（662年）に再開し、翌年朝廷政務は大明宮に移転した¹。高宗から唐の歴代皇帝はほとんどこの大明宮で聴朝をしていた。唐末に大明宮は戦乱によって破壊されてしまった²。

大明宮は唐王朝における重要な皇宮として二百余年の間存在していた。その立派な建築は最も唐時代建築の理念とレベルをあらわすものであって、中国封建社会鼎盛期の宮城建築として重要な傑作であり、それが唐以降における古代中国及び東アジア宮城にも多大な影響を与え、古代の都城特に宮城發展史上非常に重要な地位を占めるため、大明宮遺跡の発掘は古代都城と宮城の研究に特別な価値がある。

大明宮遺跡の発掘は1957年中国科学院考古研究所（のちの中国社会科学院考古研究所）工作隊が1957年から探査・研究してきて、今日までにすでに50年余を経た。筆者は大明宮考古第三代目の研究者として、もう13年の年月現場で働いてきた。現在、大明宮の考古研究は依然として計画どおりに進んでいる。

考古資料と文献史料によってみると、大明宮遺跡は不規則形となり、北部は梯形（東垣は斜めになり）、南部は長方形となる。宮城は南北の長さ（西垣を基準として）2256m、東西の幅は北端1135m、中部1355m、南部1674mである。城の周囲は7628m（図2）である。宮内の構造は基本的に正門～正殿の中軸線をして（すなわち丹鳳門—含元殿—宣政殿—紫宸殿—玄武門）配置している。宮城の構造はだいたい『周礼』にいう「前朝後寝」制にしたがって、前の半分（南部）は朝廷政務区で、後半分（北部）は生活区である。朝廷政務区は含元殿・宣政殿・紫宸殿などの三大正殿を中心として、きちんと中線を軸として建物を対称的に配置して、東～西の三つの垣によって朝廷政務区を前朝・中朝・内朝という三区にわけている。前朝では含元殿を主として中軸線の東西両側で対称的に左・右金吾仗院や東・西朝堂などを配置している。中朝では宣政殿を主とし、中軸線の東西両側に対称的に中書・門下省などの官署を配置している。内朝では紫宸殿を主としている。生活区では基本的に宮廷の池苑である太液池を中心として、中国古典園林の様式によって構築し、その周辺に宮殿・寺・観などを配置している。大明宮の宮城は計11城門がある。また、東・西・北城壁の外に「夾城」という壁を設けている。宮城内における建築はだいたい中国伝統の土木構造によって営造した。

¹『新唐書』卷三十七の注に「大明宮在禁苑東南、西接宮城之東北隅。長千八百步、廣八十步、曰東内、本永安宮、貞觀八年置、九年曰大明宮、以務太上皇清暑、百官獻貨以助役。高宗以風痺、厭西内湫濕、龍朔二年始大興葺、曰蓬萊宮、咸亨元年曰含元宮、長安元年復曰大明宮。」とある。『唐会要』卷三十の「大明宮」條にも似たような詳しい記述がある。

²『資治通鑑』卷264に「天祐元年（公元904）正月、朱温逼唐昭宗李晔遷都洛陽城、毀長安宮室百司及民間廬舍、取其材、浮渭沿河而下、長安自此遂丘墟矣。」とある。

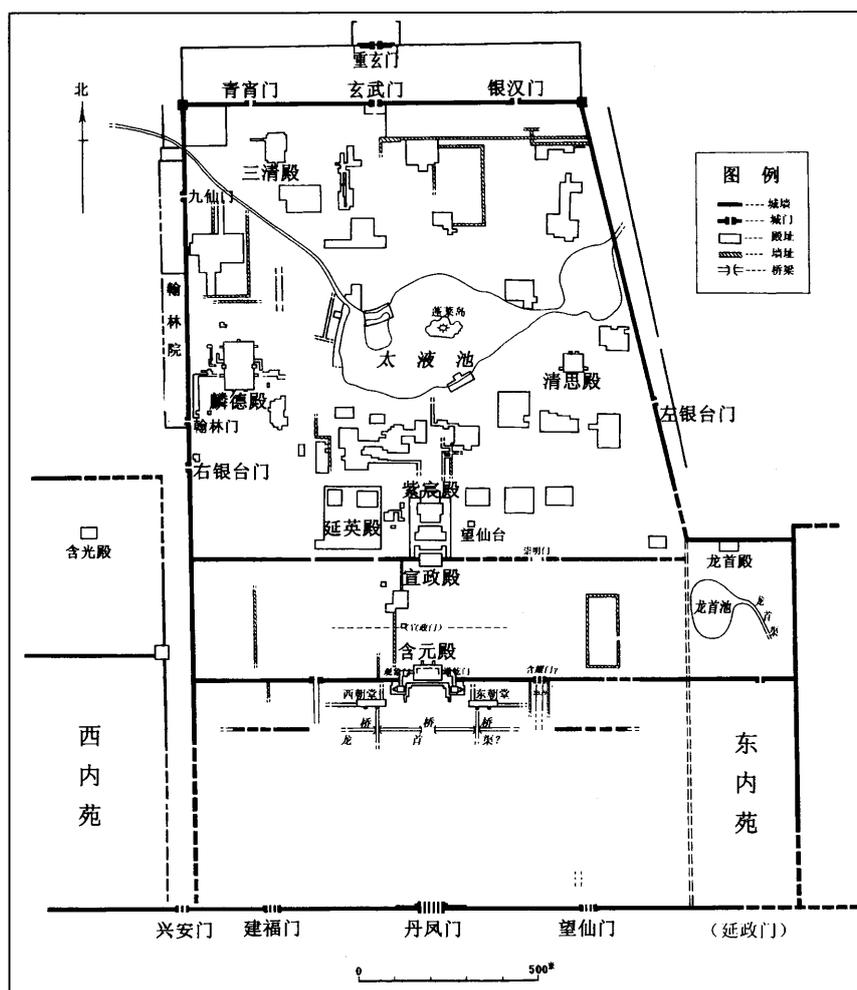


图2 唐大明宫遗址考古平面图

二、大明宮遺跡の考古学的新成績

大明宮遺跡の発掘は城垣・城門・宮殿・池苑・宗教建築・道路・水系などに関わって、発掘の成績は豊富である。

特に近年、大明宮遺跡保存企画の実施及び大明宮国家遺跡公園の設立によって、大明宮遺跡の発掘も大いに進んでいる。複数の重要な遺跡を相次いで発掘し、いくつかの新しい発見と資料を取得し、それらの発掘に関わる重要な課題についての研究、また大明宮に関しての歴史や文化的な研究として極めて学問的な価値があるとおもう。以下のようにその主な発掘新発見を紹介したい。

1、丹鳳門遺跡

丹鳳門は大明宮宮城における南の正門であり、大明宮正殿である含元殿の真南に約660m離れたところに位置する。2005～2006年の発掘によって門址は黄土の版築ででき、五つの門道があることがわかった。門址は西の三つの門道とその隔離塀・墩台及び城壁・馬道などの保存状況はわりあいよいが、中門道の東半分とその東側の遺構は激しく破壊され、底の版築基礎はわずかに残さ

れている。門址の墩台と馬道のへりを磚で化粧してある痕跡を部分的に発見した。

門址の墩台基礎は東西の長さ74.5m、南北の幅33m、高さ2mであり、唐時代地面の下における基礎溝の深さは2.2mである。門は北向きであるが東1°20"により、まさしく含元殿の中軸線と同じ向きとなる。

五つの門道の形と構造はみな等しい、幅（対面版築塼の間）はみな9.4m、南北の奥行きは33mである。門道中部少々南よりのところ、石と木が互い違いになる敷居を置く。門道の両側に幅約3mの隔離塼がり、門址両端の墩台はその城壁内側に馬道があり、東西に各一、対称的に設けている。馬道はいずれも東西の長さ54m、幅3.5mであり、その西側の馬道はわりあいよく保存された（図3）。



図3 丹鳳門（東南から西北へ）

丹鳳門遺跡で出土した主な遺物は磚・瓦・瓦当・鴟尾・門釘・瓷器・唐三彩の破片などであり、なかでも磚と瓦は最も多く、瓦の形は一般的にみられる唐時代の瓦より大きく、重い。丹鳳門遺跡の発掘によって長い間、丹鳳門はいったい三門道か五門道かという意見の論争を解くことができた。門址における規模の大きさ、門道の広さ、馬道の長さなどは、いずれも今日に知られている隋唐時代の城門発掘のトップであり、当該宮門の高いランクと皇朝の宏大である気風がよくあらわれ、また中国古代都城考古学、中国古代建築史及び外国宮城制度との比較研究にも貴重な第一級資料を提供した³。

2、龍首渠及び関連する橋の遺跡

2005～2006年の発掘によって含元殿遺跡の南における御道の北端に一本の含元殿の基礎と東西に平行している水渠、及び関連する三つの橋、また磚道などの遺跡を発見した。文献史料よると当該水渠は「龍首渠」だったと考えられる。龍首渠は含元殿遺跡における大型台址の南から130m離れたところにある。水渠はだいたい含元殿の南へりと並行に東西に走っている（図4）。何ヶ所かの発掘現場によってみると水渠では両側の壁はだいたい直き、底部はわりあり平らになって

³ 中国社会科学院考古研究所西安唐城隊「西安市唐長安城大明宮丹鳳門遺址の発掘」『考古』2006年第7期を参照。

両側の壁にはところによって塼の痕跡が発見される。水渠は南北の幅3.65～4.0m、深さ（唐時代の地面から下に）約1.6mである。東段の渠は多少浅き、西段の渠は少し深き、渠の水は東から西に走っていたと推測する。渠内から大量の唐時代の塼・瓦・石・貝殻・陶瓷器・銅銭・鉄釘・鉄剣（直柄直刀形）などの遺物が出土された。

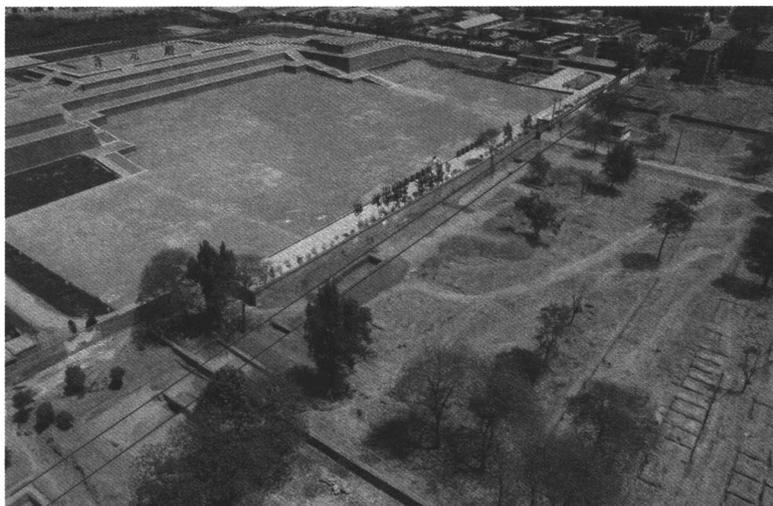


図4 含元殿南部に龍首渠の遺構が新しく発見

龍首渠遺跡では三つの橋の遺構を発見し、木造の橋が破壊されてしまっていたが、木柱の基礎穴の痕跡が残されていて、別々に含元殿の真南、含元殿西朝堂の真南、含元殿東朝堂の真南に散在している。それらはおそらく文献に載せる「御橋」「下馬橋」の遺跡であろう。説明しやすいため、ここでそれを中央橋、西側橋、東側橋と呼ぶ。中央橋の基礎は東西の長さ約17m、南北の長さ約4.3mである。西側橋は東の中央橋まで約128m、橋の基礎は南北の長さ4.65m、東西の長さ6.85mである。東側橋は西の中央橋まで約129mであり、形やサイズは西側橋の基礎址に似ている（図5）。



図5 含元殿の真南に位置している龍首渠の中央橋の遺構（西から東へ）

龍首渠の南側では渠に沿っている、東西に走る道路と磚舗装の歩行道遺跡を発見した。道は南北幅が約15m、道に唐時代のわだちが鮮明に残されている。歩行磚道は西側橋遺構の南北両側に早期、晩期に分け、いずれも南北に走っている。晩期の磚道遺構は28.5m、幅約1.2mである。路面の舗装磚は大部分破壊し、道路わきに立てる「側立磚」やその外側に「側立磚」を固定するための「頂縫磚」や路面土の下に敷かれるばらばらである磚がわずかに残されている。早期の磚道は晩期の磚道の真下0.5mに埋められ、約長さ5.6m、幅1.1mほどを発見した。路面に蓮華紋方磚も散在している、磨きあげ、表に浸炭処理された青掘方磚で舗装されている。この磚道は北端に西朝堂があるので、大明宮が成立した初期、官吏を朝廷へあげる磚道であっただろうと推測している⁴（図6）。



図6 西朝堂の南に位置している磚道とその西側橋の遺構（南から北へ）

龍首渠と橋遺跡の発見は、あらためて大明宮内部構造を検討するきわめて重要な資料である。今日発見した龍首渠の所在地も走り向きとも、ちょうどこれまで考えてきた大明宮にある東西に走る一番南の宮墾が所在地であり、大明宮における龍首渠の発見と確認によってついに直接的に大明宮内にある三つの宮墾について考え直すことができた。これは大明宮の内部構造研究及び古代宮城研究として極めて重要なことである。

3、太液池遺跡

遺跡は大明宮における北部の中央において、西に麟徳殿まで230m、東に大明宮の東垣までわずか5mである。発掘によって太液池は西池と東池に分け、西池は太液池の主池であり、その面積は広くて楕円形となって、東西の最大距離は484m、南北の最大距離は310m、約14万㎡であり、東池はわりあい小さく、円形で南北の長さ220m、東西の幅は約150m、面積は約3.3万㎡である。

太液池の発掘は早く1957年に西安唐城工作隊が始めたが、一般的に調べたことにとどまった。

⁴ 中国社会科学院考古研究所西安唐城考古隊「西安市唐大明宮含元殿遺址以南の考古新発見」『考古』2007年第9期を参照。

1998年の秋に西安唐城工作隊は安家瑤先生の主宰によって大明宮太液池遺跡の全面踏査を行った。明确了太液池周辺における岸の範囲や岸にあるいくつかの建築遺跡、また蓬萊島の西約100m離れたところで島一つを見つけた。2000年の春、太液池東南部と西部に発見した島と蓬萊島南部を試す発掘を行った。2001年の春、通过对太液池南部高地和西北部を試す発掘し、宮殿遺跡一基と高台建築址一ヶ所を見つけ、初めて太液池の西北部にある水渠は太液池への入水渠と確認した。2001年10月、西安唐城工作隊と日本奈良文化財研究所の中日共同考古隊は正式に太液池遺跡を発掘した。2002年度、発掘は主に太液池西岸で行って、大面積な池の西部岸と岸にある道路や廊庑建築遺構を発掘した。2003年春～夏に、太液池の北岸と蓬萊島南部での二カ所の遺構を発掘し、太液池北岸と新発見した島の北へりの間にある渠のなか廊下つき床式建築一組みと蓬萊島南岸にある園林遺跡を発掘した。2004年、太液池南岸の高地で保存状態がよい一組の廊下に囲った庭院の遺構をみつけて発掘したうえに、大明宮南部の朝務区から北部生活区までの間に過渡的な建築の様式と配置をおおまかに知ることになった⁵。2008～2010年に引きつづき太液池西池の東部及び太液池東池遺跡を発掘し、太液池西池東部の一島を発見、太液池東池遺跡に関して状況がさらに把握できた（図7、8、9、10）。



図7 太液池の東と南岸の遺構（東北から西南へ）



図8 太液池北岸の廊庑建築（西南から東北へ）



図9 蓬萊島南部の遺構（西から東へ）

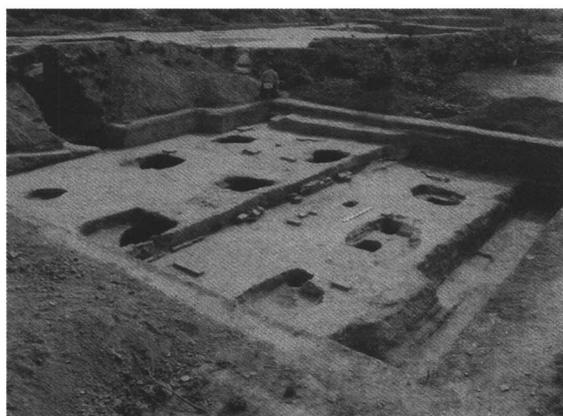


図10 太液池南岸の宮殿遺構

⁵ 中国社会科学院考古研究所・日本奈良文化財研究所中日联合考古隊「唐長安城大明宮太液池遺址発掘簡報」『考古』2003年第11期。「西唐大明宮太液池南岸遺址発現大型廊庑建築遺存」『考古』2004年第9期。「西安市唐長安城大明宮太液池遺址」『考古』2005年第7期。「西安唐長安城大明宮太液池遺址の新発現」『考古』2005年第12期。

太液池遺跡の遺物は豊富であり、種類が多い。埴・瓦・石制品・陶磁器・ガラス器・骨器・鉄器・青銅器などある。なかにかくつかの唐時代園林建築部材、例えば浮き彫り龍紋のある石欄板は初めての出土品であり、唐の建築研究について極めて重要な実物資料となる（図11、12、13、14、15）

太液池遺跡の発掘はこれまで古代宮廷池苑に関する考古として最も全面的に行った事業の一つである。その発掘は面積大きい、範囲広い、類多い、出土品豊富であり、中国古代宮廷池苑研究及び東アジア古代宮廷池苑研究に非常に貴重な資料を与えた。



図11 太液池で出土した蓮花方埴

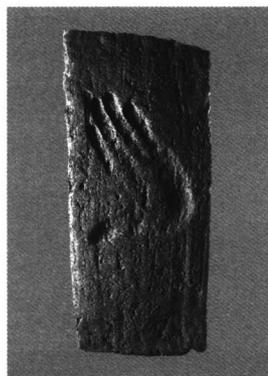


図12 太液池で出土した手印埴

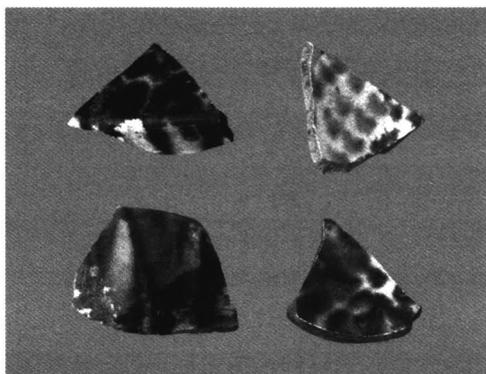


図13 太液池で出土した唐三彩

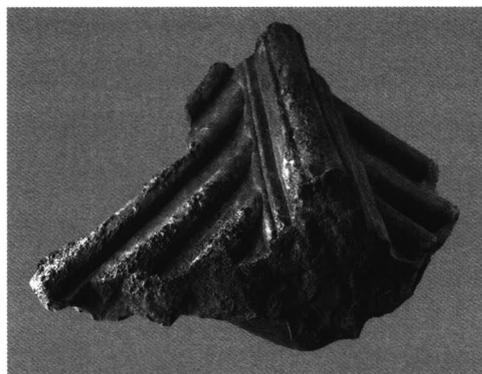


図14 太液池で出土した石灯の破片



図15 太液池で出土した雕龍石欄板

三、興安門遺跡の最新考古発掘と研究

1、興安門歴史の沿革

興安門は唐長安城外廓城における北垣東段の一つの門址であり、『唐六典』の注に「(興安門)南当皇城之啓夏門・旧京城入苑之北門、開皇三年(583年)開、余四門(丹鳳等門)並与宮同置。」とある。すなわち興安門は隋開皇三年(583年)に初めて造られて、唐に沿用し、隋・唐初に京城から城北における禁苑へ出入する主な門址の一つである。唐太宗貞観八年(634年)に大明宮を造り始め、唐高宗龍朔三年(663年)大明宮ができた際、これが大明宮門址の一つとして、大明宮の翰林院及び唐長安城北部にいたる重要な城門であった。唐時代皇帝の多くはここで「受俘」儀式を行った。唐末に破壊された(図16)。

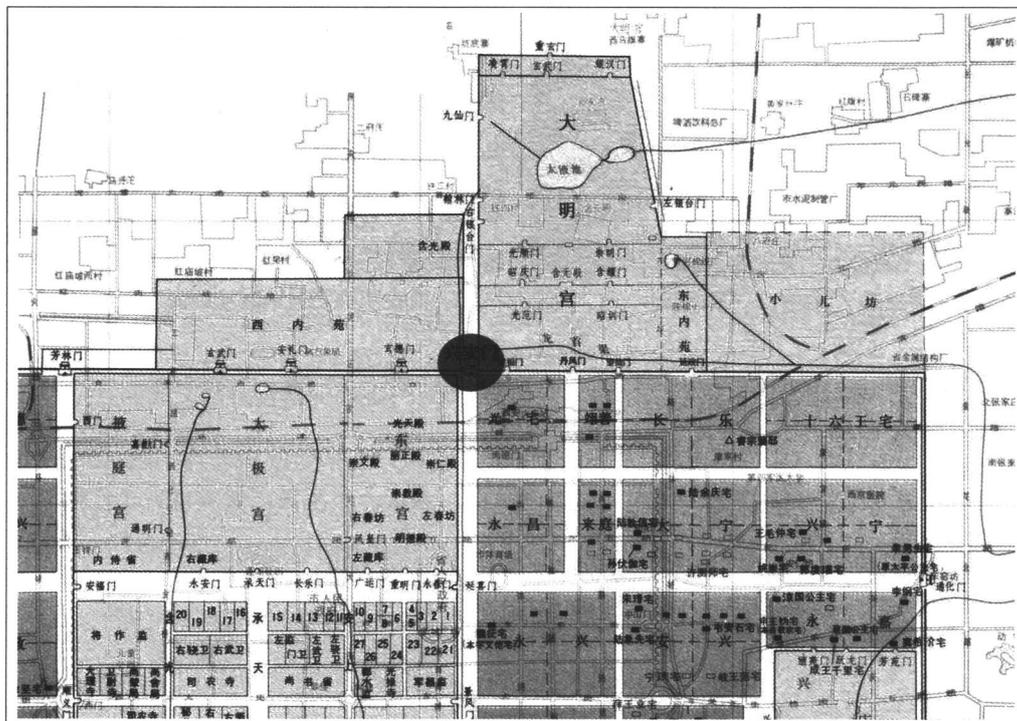


図16 興安門遺址位置平面イメージ図

2、興安門考古発掘の最新成果

2009年、興安門の発掘まで学界では注目されていなかったが、最新の考古成果からみると、興安門遺跡の発掘は唐長安城及び唐大明宮の研究について非常に重要な価値がある。発掘によると、興安門は建福門遺跡の西に220余メートル離れるところ(建福門遺跡の中心～興安門遺跡の中心)に位置する。門址上部の建築はすでに破壊され、門址墩台の版築基址だけ残された。発掘した結果、門址は少なくとも早と晩二期に分けられて、しかも早期門址と晩期門址の形式は明らかに違うものである。

興安門の晩期門址は早期門址の上に見つけている。門址は方形、南向き。二つの門道がある。門址遺構の範囲は東西28m、南北18.9mとなる。遺構の外壁に磚舗装があるがほとんど破壊されていて、ただ門址南側に磚舗装の痕跡が残された。二つ門道の形式は同じ、幅はみな5.85m（礎石の中心～礎石中心）、門道の中部に石の敷居が設けられ、両側に礎石を置き、礎石のほとんどは破壊され、二つの門道の南端に4つの礎石しか残されていない。門道の中部の隔離塼の幅は東西約3mである。「馬道」は城門内の東側（城垣の北）に設け、東西21.4mの長さ、南北幅3.8mほどの遺構が残している。馬道の東端は大明宮西宮城の垣に繋がって、直角のかねじゃく形となっていて、恐らくこの馬道の東端は大明宮西宮の垣であるので「転折」と呼ばれた（図17、18）。



図17 興安門晩期門址（西南から東北へ）



図18 興安門晩期門址隔塼の南部

興安門の早期門址は晩期門址の下に埋められている。門址の遺構は方形で北向き（晩期門址の向きと正反対となっている）。門址の範囲は東西に約39、南北に約19mであり、三つの門道はみな幅5.4～5.9mであり、左・右馬道は門内（垣の南）にある墩台の西側に城壁付近に位置している。早期興安門の遺跡は晩期門址の下に埋められているので、全面的な発掘はまだ行っていない。

出土した遺物は主に磚・瓦など建築部材の破片であり、瓷器や銅の飾り品や仏像、佛像、銅銭などもある。

3、興安門遺跡についての研究

（1）興安門と隋大興唐長安城の城門制度

隋大興唐長安城の城址は規模が巨大であり、文献史料によって城門は数十カ所あり、なか廓城は13門、皇城7門、宮城6門、大明宮11門、興慶宮は約7門⁶である。これらの城門のなかの大明

⁶ 唐長安城の廓城に13門があり、それらは安化門、明德門、啓夏門、延興門、春明門、通化門、延平門、金光門、開遠門、光化門、景耀門、芳林門和興安門である。皇城に7門があり、含光門、朱雀門、安上門、景風門、延喜門、順義門、安福門である。宮城に7門があり、永安門、広運門、承天門、長樂門、永春門、玄武門、安礼門である。大明宮に11門がり、建福門、丹鳳門、望仙門、延政門、左銀台門、右銀台門、興安門、九仙門、青宵門、玄武門、銀漢門である。興慶宮の8門は興慶門、金明門、通陽門、明魏門、麗苑門、躍龍門、芳苑門である。

⁷ 大明宮成立年代は唐太宗貞觀八年（公元634年）～唐高宗龍朔二年（公元662年）であるので、大明宮各城門も同時期に成立したと考えられる。興慶宮の成立年代は開元二年（公元714年）～開元十六年（公元728年）であり、数年後に増築したことがあるので、興慶宮の各城門の成立年代も同時期だろうと推測できる。

宮と興慶宮の諸城門は中唐期前後に造って⁷、ほかの諸城門は殆ど隋開皇二年（公元582年）に隋大興城を造ったときできて、唐時代にそのまま使用した（修理しながら）⁸。これらの城門は隋・唐王朝盛衰の目撃者のような存在であろう。

唐長安城諸城門は基本的に『周礼』考工記にいう「匠人営国」「旁三門」という原則通り配置したものである。例えば、廓城の13門は東側、西側、南側に各三城門を設け、正東門は春明門で、正南門は明德門で、正西門は金光門である。北側には四つの城門を設けた。「旁三門」の配置は廓城だけではなく、皇城・宮城とも同じ配置である。皇城の南側に三つの城門で、宮城の北側及び「大内」（「西内」ともいう）太極宮の南側にも三門であり、「東内」大明宮の南側と北側みな各三門を設け、すなわち南正門の丹鳳門、北面正門玄武門であるが、それぞれ正門の両側に各一門を設けているので「旁三門」の配置となる。

「旁三門」の配置は先秦時代の都城にあまりみられなく、魯国の故城から漢長安城まで徐々にまとまった都城「旁三門」制が成立してから、歴代にその制を踏襲していた⁹。唐以降の北宋開封城、金中都、元大都、明清の北京城城門の配置はみなある程度「旁三門」制を踏襲していた。

各城門の門道にいうと、長安城の諸城門は廓城正南門の明德門と大明宮正南門の丹鳳門が「一門五道」となるが、他にはほとんど「一門三道」である。例えば、廓城の諸城門（明德門を除いて安化門、金光門、啓夏門、延平門、春明門、延興門など）や皇城の城門（含光門、安福門）である。これらの城門はすべて発掘や踏査によって証明された。「一門三道」という門制はすでに先秦時代の文献に記され¹⁰、今日の考古資料にみると、夏王朝都城である河南偃師二里頭一号宮殿の南門、春秋晩期における楚都紀南城の西城門と南城門の水門など、みな「一門三道」制であるが当時はまだ定着した制度とはいえない。前漢の長安城はすべての城門がみな「一門三道」となつてのちに歴代でもこの城門制度を踏襲していた¹¹。発掘によると漢長安城の12の門のなかで1957年から発掘した霸城門、西安門、直城門、宣平門及び1987年に発掘した横門など、みな「一門三道」である。後漢時代の洛陽城も12城門である。北魏洛陽城の各城門は後漢洛陽城の城制をそのまま継承して、文献にもその城門は「一門三道」と記した¹²。すでに発掘した東魏と北齊鄴南城の朱明門も一門三道である¹³。唐時代にいたっても同じ門制を続けて使用していた。すなわち都城の

⁸ 『隋書』煬帝本紀に「（大業九年正月）己亥、遣代王侑・刑部尚書衛玄鎮京師……（三月）丁丑、發丁男十萬城大興。」とある。『唐會要』（王溥撰、中華書局1955年版）卷八六『城郭』に「（唐高宗永徽）五年十一月十一日、和雇州夫四萬一千人、修京羅城郭、三十日畢。九門各施觀。明德觀正門、以工部尚書閻立德為始。」とある。『旧唐書』玄宗本紀に「（開元十八年）夏四月己卯、築京城外郭城、凡十月而功畢。」とある。

⁹ 劉慶柱・李毓芳『漢長安城』（20世紀中国文物考古發現与研究叢書、文物出版社2003年）を参照。

¹⁰ （漢）鄭玄注、（唐）賈公彥疏『十三經注疏・周礼注疏』卷41『冬官考工記下』匠人に「匠人営国、方九里、旁三門。國中九經九緯、經涂九軌」とあり、賈公彥疏に「王城面三門、門有三涂、男子由右、女子由左、車從中央。」とある。

¹¹ 劉慶柱・李毓芳『漢長安城』（20世紀中国文物考古發現与研究叢書、文物出版社2003年）を参照。

¹² 『河南志』卷二に引く『洛陽記』に「洛陽有十二門、門有閤、閉中、開左右出入」とある。『洛陽伽藍記・序』に洛陽城「一門有三道」とある。

¹³ 中国社会科学院考古研究所鄴城工作隊「鄴南城朱明門遺址發掘簡報」『考古』1990年第1期。中国社会科学院考古研究所、河北省文物研究所鄴城考古工作隊「河北臨漳縣鄴南城朱明門遺址的發掘」『考古』1996年第1期。

廓城とほかの皇宮禁城（「三大内」）における主なる城門も「一門三道」となる。すでに発掘した延平門、含光門、建福門、望仙門及び勘探した春明門、開遠門、安化門はみな「一門三道」となる。唐西京の長安や東京の洛陽も例外ではない。また、発掘した唐洛陽城の定鼎門、長夏門、厚載門、建春門、皇城右掖門、宮城追応天門など、みな「一門三道」である。しかし唐時代には例外もある。例えば唐長安城では廓城正南門の明德門と大明宮正南の門丹鳳門とも「一門五道」である。その特別な形制はこれまでの古代城址発掘にはまだほかには例がなく、なぜそのような配置となったか、その起源はまだ定論がない。

唐長安城にはすべての城門とも「一門三道」ではなく、廓城と「三大内」など主要城門以外、ほかの城門、宮城門では「一門一道」の形がある。例えば、大明宮北垣の玄武門、銀漢門、青霄門、西垣の右銀台門、東垣の左銀台門はみな「一門一道」である。また、宮城内部の門址は「一門二道」のケースもみられる。例えば、大明宮に入って二重目の扉における含耀門と昭慶門はその例である。「一門一道」「一門二道」の門制は、城門制度として「一門三道」よりランクが低いのはあきらかなことであり、宮城南門以外のところしか配置しない。

都城城門の「一門三道」制について学界ではすでに定論があり、すなわち一般の人間はみな左右両側の門道で出入（左入右出）し、まん中の門道は皇帝専用の御道である。『唐六典』卷二十五に「凡宮殿門及城門皆左入右出」とある。

興安門とは『大唐六典』の注によると門は初めて開皇三年（583年）に造ったとき、隋大興城（のちの唐長安城）北垣に禁苑に出入する一つの城門であり、唐時代になっても興安門はまた京城を出、城外の禁苑に入る城門の一つである。『旧唐書』卷六十五に「太宗（李世民）從數百騎出興安門、至延喜門、長孫无忌馳至馬前諫曰：『餌石臨喪、經方明忌。……』其言甚切、太宗猶不許。」とある。文献には大明宮を造る前の興安門に関する記載は少なく、当該門址の形制にもほとんど記がない。しかし、考古発掘によって興安門は隋初から唐大明宮の成立前に、ただ「一門三道」である一般的な廓城の城門であり、すなわち興安門の早期門址であるとわかった。

興安門についての発掘資料によると、興安門早期門址と晚期門址とは規模も形制も大分違うことが明確である。特に門址の形は早期には三つの門道であったが、晚期には二門道しかなかった。門道の変遷は実は唐代城門として城門等級の変化ともいえ、もちろんその等級の変化にしたがって当該門の機能も変わっていた。これは中国古代都城制度としてもよくあること。また、興安門の門道が変化した同時、門の向きもかわっていた。同じ城門が等級と門向きとも変化したことは、都城の発展と変遷についての考古研究として独特な価値があるはずである。具体的には唐長安城や大明宮の研究としてもかなり重要であると思う。

（何歳利：中国社会科学院考古研究所教授）

（馬 彪：山口大学人文学部教授）